群教セ	G01 - 04
	平16.221集

読書を楽しむ生徒を育てる国語科指導の工夫

――手作り絵本による他者と感動を共有するための読み聞かせを取り入れて――

特別研修員　　石原　芳樹　（群馬県立桐生西高等学校）

《研究の概要》

本研究は、手作り絵本の読み聞かせ活動を取り入れて、読書を楽しむ生徒を育てる国語科指導を工夫したものである。具体的には、園児にふさわしい題材・言葉遣い・場面等についてグループで話し合いながら絵本作りをし、その絵本で園児に読み聞かせ活動を行った。絵本作りの楽しさや園児と感動を共有する読み聞かせの楽しさを味わうことを通し、読書の楽しさを知り、読書を楽しむ資質が育つようにしたものである。

【キーワード：国語－高　読むこと　読書　手作り絵本　読み聞かせ　グループ活動】

Ⅰ　主題設定の理由

子どもの読書離れが言われて久しい。それは、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同で行っている読書調査やＯＥＣＤの学習到達度調査（ＰＩＳＡ）等の結果ではっきりと示されている。本校の生徒も例外ではなく、休み時間や放課後に本を開いている生徒は少数派である。「子どもの読書活動の推進に関する法律」が平成13年に成立し、それに基づき、本県では、今年度から５年間にわたり「群馬県子ども読書活動推進計画」が実施されている。このように、読書は子供にとって極めて重要であり、必要不可欠なものであるという共通認識が徐々に広まり、読書あるいは読書指導の環境整備が進んでいる。

読書が魅力的で楽しいものであることは、多くの先人たちが述べている。しかし、本校の多くの生徒は残念ながらその自覚がなく、自ら本を読む生徒が少ない。そのことに私は強いもどかしさを感じる。読書の重要性や必要性は、国語の学力を伸ばすという視点のみならず、多方面から考えるべきである。現在の日本の社会は、家庭崩壊・虐待・いじめ・引きこもり等の多くの問題を抱えている。このような時代であるからこそ、子どもの心の糧となる読書が必要なのである。読書は、心にうるおいをもたらすものである。習慣的な読書によって豊かな心をはぐくみ、生きる力をつけさせたい。そのためにはまず、生徒が読書の楽しさに気づき、実感することが必要である。

読書の楽しさを強く生徒に印象づけるために、手作り絵本による読み聞かせを取り入れることを考えた。読み聞かせの相手は、日常的な接点のあるクラスメートではなく、その反応が良くも悪くも最も率直に表れる園児がよりふさわしいと考えた。園児への読み聞かせの活動で、園児の喜ぶ姿、真剣なまなざしを目の当たりにすることによって心を強く動かされるはずである。その感動は生徒の心に、読書の価値や意義として刻まれ、読書の楽しさを知ることにつながるはずである。

以上のことから、手作り絵本で園児に読み聞かせをし、園児と感動を共有することによって、読書の楽しさに気づき、読書を楽しむ生徒を育てることができると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

自分たちで作った絵本を読み聞かせ、相手の喜ぶ姿や真剣なまなざしを見て、感動を共有することが、読書の魅力に気づき、読書の楽しさを知り、読書を楽しむ生徒を育てるために有効であることを実践をとおして明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　つかむ場において、読み聞かせの講義を受ければ、他者に伝える喜びやおもしろさ、そして難しさを自分なりにとらえられるようになり、読書への興味や関心が増すであろう。

2　広げる場において、相手が感動するにふさわしい題材・絵・言葉遣い等についてグループで話し合いながら絵本の作成をすれば、より深い読みができるようになり、読書の意義や価値を知るであろう。

3　まとめる場において、手作り絵本を用いた読み聞かせをすれば、相手の喜ぶ姿を見て相手と感動をより深く共有し、読書の楽しさを知るようになり、読書を楽しむための資質が育つであろう。

Ⅳ　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1) 読書を楽しむ生徒とは

本研究での読書を楽しむ生徒とは、自らが読書に楽しみを見いだす生徒である。人は様々な状況や目的で本を読む。「読まなければならない」という状況では、だれもが仕方なく本を読むであろう。しかし、それは苦痛を伴うものであって、内からわきおこる読書への純粋な欲求からのものではない。生徒が、読書に楽しみを見いだすには、楽しいと感じる体験が必要である。手作り絵本での他者（園児）への読み聞かせを通し、他者と感動を共有することによって、読書を楽しむことをより強く実感できると考えた。

(2) 手作り絵本による他者と感動を共有するための読み聞かせとは

既成の文章を聞き手に合わせた絵本にし、その絵本で感動を共有するための読み聞かせ活動を行うことである。既成の絵本を用いず、手作り絵本による読み聞かせを考えた理由は、題材の選択・内容理解・構成理解等の過程において、グループでの話合いを通じ、本への関心が高まり、より深い読みをすると考えたからである。また、相手にふさわしい言葉遣い・絵・場面等を考え、的確に表現する力を身につけることが、読書の魅力に気づくことと結びつくと考えたからである。さらに、これら一連の活動から得られる充実感や達成感は、生徒に自信をもたせ、それが読み聞かせに生きると考えた。

しかし、この過程を経るだけでは、園児への十分な読み聞かせはできない。なぜなら読み聞かせをする側の知識や経験が乏しいからである。そこで、より有効な読み聞かせができるよう、つかむ場で、外部講師による読み聞かせの講義を取り入れ、読み聞かせにかかわる技術だけではなく、意義、心構え、喜び、おもしろさ、難しさ等について学ぶ機会を設定した。

そして、まとめる場で、園児に読み聞かせをすることによって、率直な喜びや驚きの反応を実体験し、それを自分のこととしてとらえ、読書の根源的な魅力に気づき、本を読むことの喜

び・読後に本について語る力等の読書を楽しむための資質が育つと考えた。

2　研究の方法

研究の見通しに基づき、次のような方法で授業実践を行い、検証する。

(1) 研究実践の計画

対　象	群馬県立桐生西高等学校　１年３組(37名)	期　間	10月下旬～11月上旬	予定時間	10時間
単元名　読書の楽しさを知る	抽出生徒				

A男：読む力に課題があるので、本から絵本にする作品を選ぶ活動や読み聞かせの活動を通し、読むことへの意欲を喚起し、読書に対する苦手意識を克服できるよう支援したい。
B子：子ども好きで、保育士になりたいと希望しているので、園児への読み聞かせ活動を通し、園児と感動を共有することによって読書が「楽しい」ものであることに気づくよう支援したい。

(2) 検証場所と方法の見通し

見通し	検証場所	検証の観点	検証の方法
見通し1	つかむ場	読み聞かせの講義を聞き、メモを取ることが、他者に伝えることの喜びやおもしろさ、そして難しさを自分なりにとらえ、読書に対する興味や関心が増すことに有効であったか。	○講義を聞き、うなずきながらメモを取っているかを観察することにより、読み聞かせへの理解が高まったかを分析する。 ○講義を楽しいと感じたか、講義で何を学んだかを自己評価カードから読み取り、読書に対する意識の変化を分析する。
見通し2	広げる場	園児が感動するにふさわしい題材・場面・絵・言葉遣い等についてグループで話し合いながら絵本の作成をすることが、文章を丁寧に読む大切さを知ることに有効であったか。	○生徒の話合いと絵本作成の姿を観察することによって、ふさわしい題材・場面・絵・言葉遣い等について積極的に意見交換が行われているかを分析する。 ○完成した絵本によって、ふさわしい題材・場面・絵・言葉遣い等になっているかを分析する。 ○絵本作りを楽しいと感じたか、絵本作りで印象的だったことは何かを自己評価カードから読み取り、読書に対する意識の変化を分析する。
見通し3	まとめる場	手作り絵本による園児と感動を共有するための読み聞かせをすることが、読書の楽しさを知るようになり、本を読むことの喜び・読後に本について語る力等の読書を楽しむための資質が育つことに有効であったか。	○生徒と園児の観察・ビデオ再生法によって、生徒と園児の表情や雰囲気等から感動を共有しているか分析する。 ○自己評価カード・相互評価カード・発表内容によって、読書に対する意識の変化を分析する。

Ⅴ　研究の展開

1　本単元で育てたい言語能力　　楽しみながら読書をする力

2　単元名　　読書の楽しさを知る

3　単元の考察

読書習慣のある生徒は、多かれ少なかれ読書の楽しさを知っている。本との出会いによって、読書の楽しさやすばらしさに魅了され、読書習慣が身についている生徒がいる一方、自ら本を読もうとはせず、苦痛すら感じている生徒もいる。

生徒が本をたくさん読むようになるには、読書を「楽しい」と感じることが不可欠であると思われる。本を読まない生徒も読書の楽しさやすばらしさに気づけば、自ら本を読むようになり、読書の習慣が身につくはずである。教師が読書の意義や重要性を話したり、本の紹介をしたりすることも必要であるが、それだけでは十分な効果は上がらない。そこで、本研究では、他者と感動を共有することを通して読書の楽しさを知ることを考えた。読書の楽しさを知り、本を読むことの喜びや読後に本について語る力等の読書を楽しむ資質が育つよう促したい。

4　単元の目標及び評価規準

目標	意欲的に絵本作成に取り組み、その絵本を用いて読み聞かせをし、他者と感動を共有することによって、読書の楽しさを知る。	
評価規準	国語への関心・意欲・態度	・読み聞かせについて理解を深めようと外部講師の講義に耳を傾け、必要な事項を　もれなくメモしている。 ・題材を深く読み、積極的に絵本作りに取り組んでいる。
	読む能力	・園児の状況をふまえ、与えられた題材からより適切な作品を選ぼうとしている。 ・外部講師の講義で学んだことを生かして、園児が喜ぶ読み聞かせをしている。
	言語事項	・絵本作成において、園児にふさわしい適切な絵や言葉遣いを用いている。 ・発表の場面で、自分の意見や感想を端的に述べる言葉を用いている。

5　指導と評価の計画（全10時間）

場	時間	ねらい	学習活動	教師の支援	評価項目
つかむ場	1	・より効果的な読み聞かせができるよう外部講師に学ぶ。	・読み聞かせの講義を聞く。 ・ノートに読み聞かせのポイントを箇条書きにまとめる。	・静かに聞くよう指示し、気づいたことをノートに簡潔にまとめるよう指示する。 ・疑問に感じたことを中心に尋ねるよう指示する。	関 講師の話を意欲的に聞き、ノートにまとめている。
	2	・読み聞かせに対する理解を深めることによって、読書への興味や関心を強める。	・グループで読み聞かせのおもしろさや難しさ等について話し合う。	・１グループ３人の班編成をする。 ・各自が自分の感想や意見を発表できるよう、机間指導をし、支援する。	言 グループ内で自分の感想や意見を発表している。 言 読み聞かせについての理解を深めている。
広げる場	3	・与えられた題材を読み、絵本にする作品を決める。	・自分が選んだ作品の選択理由をグループ討議し、作品を決定する。	・なぜその作品を選んだのかを明確に意識するよう促す。	関 与えられた題材を意欲的に読んでいる。 読 積極的に自分の意見を発表している。
	4 5 6	・絵本作りをとおし、読書の意義や価値を理解する。	・話の情景や構成に注意して、絵本にする場面を決める。 ・各場面に適した絵や文章を考え、絵本作りをする。	・どの場面を絵にすればより効果的なのかをグループで十分話し合うよう指示する。 ・読み聞かせの相手を意識し、適切な絵や言葉遣いになるよう助言する。 ・絵本作りが過度の負担とならないよう支援する。	関 意欲的に絵本作りに取り組んでいる。 言 園児がすぐに理解できる絵や文章になっている。
まとめる場	7 8	・読み聞かせの楽しさを味わう。	・園児に読み聞かせをする。	・講義で学んだ事項の確認をし、効果的な読み聞かせができるよう支援する。	読 感動を共有する読み聞かせを行っている。
	9 10	・読書の楽しさを知る。	・活動を振り返り、自己評価カードと相互評価カードに記入する。 ・自己評価カードと相互評価カードに基づき発表する。	・活動を振り返り、客観的な評価をするよう助言する。	言 自己評価カードや相互評価カードを意欲的に作成している。 言 他の生徒に理解できるように自分の考えを明確にしている。

Ⅵ　研究の結果と考察

1　読み聞かせのおもしろさをつかむ場において、読み聞かせの講義を熱心に聞き、意欲的にメモを取ることは、他者に伝える喜びや難しさをとらえるようになり、絵本を何度も楽しく読もうとする意欲を高めることに有効であったか

国語の授業で、「教科書を全く使用せず、自分たちで絵本を作って、学校の外に出かけていき、園児に読み聞かせをする。」という活動をすると示したところ、「ほんとですか。」、「やったー。」、「おもしろそうじゃん。」、「楽しそう。」等の言葉があちこちで聞こえてきた。このことから、生徒が絵本作りと読み聞かせに強い興味をもったと考えられる。

生徒は外部講師の講義を静かに熱心に聞くことができた。また、講師が読み聞かせを成功させるための工夫について強調している事項を多くの生徒がうなずきながらメモをしていた。講義の内容がより具体的であったことと話し方がとても巧みであったこともその理由であるが、自分たちが読み聞かせをする立場におかれているという状況をよく理解していたと考えられる。また、絵本作りをし、その絵本を用い保育園で読み聞かせをすることが、生徒の興味・関心を高め、講師に目を向け話を聞くことができた大きな要因であると考えられる。

Ａ男は、講師に目を向け静かに講義を聞いていた。しかし、Ａ男が所属する班では活発な話合いは行われていなかった。どのように話合いをしたらよいか、講義で何を学んだか、どのような感想をもったかを一人ずつ発表するように助言したところ、少しずつ意見、感想、疑問等が出され、話合いをすることができた。自己評価カードには、「とても楽しかった。子どもたちと接するのにとても勉強になった。」と答えている。

Ｂ子は、子どもが大好きで、将来は保育士になることを希望している生徒である。保育園を訪問し読み聞かせをすることを話したときに、目を輝かせとてもうれしそうな表情をしていた。講師の話を聞き漏らすまいと講師からほとんど目をそらすことがなかった。自己評価カードに、「幼稚園のころに戻ったみたいで楽しかった。」と書いている。グループでの話合いでも、講義で学んだ事項について他の二人の班員に何度も話しかけて確認をしていた。

以上のことから、読み聞かせの講義を聞き、メモを取ることは、他者に伝える喜びやおもしろさ、そして難しさをとらえるようになり、絵本を何度も楽しく読もうとする意欲を高めることに有効であったと考える。

２　広げる場において、話し合いながら絵本を作成したことは、相手を意識した文章表現や構成を深く考えられるようになり、文章を丁寧に読む大切さを知ることに有効であったか

資料１　Ｂ子の絵コンテ

生徒はまず20数冊ある本の中から班ごとに１冊の本を選ぶ活動を行った。実際には限られた時間であったので５、６冊の本を手に取り、その中から３人で話し合って選んでいた。さらに、選んだ本の中には、幾つかの短編が載せられていたので、どの話を絵本にするかを、あらすじ・登場人物（動物）・結末等を明確な基準にして話し合っていた。

生徒から「言葉遣い」、「どの場面を絵にしたらよいか」などの質問が出された。「簡潔でわかりやすい表現」、「文章構成をよく考え、園児にわかりやすい場面」にすることをアドバイスした。どの班でも、どのような文章表現や構成にすればよいかを互いに意見を出し合い、活発な話合いが行われていた。また、場面が決定された後、仕事分担をし、協力して楽しそうに絵本作りをしていた。36名中34名（94%）の生徒が、絵本作りが「楽しかった。」と自己評価カードで答えている。

Ａ男の班では、読解力のある生徒が、場面と文章を決定する際に中心となっていた。しかし、絵を描く段階では、Ａ男が文章構成に注意を払い、「この場面では、こういう絵にしよう。」、「この部分はこういう色にしよう。」と意見を出し、意欲的に作品を仕上げていた。自己評価カードには、「文に沿って絵を描くところ」が「楽しかった。」と書いている。

Ｂ子は、下書き用紙に各場面の絵コンテを描く作業を自分から引き受け、文章表現についても他の二人に意見を求め、班で中心的な役割を果たしていた。自己評価カードに、「最初はきちんとできるのか不安だった。でも作っていくうちに、どんどんできあがってきて、忙しかったけれどすごく楽しかった。とても良い絵本作りができた。」と書いている。

以上のことから、話し合いながら絵本の作成をしたことは、相手を意識した文章表現や構成を深く考えるようになり、文章を丁寧に読む大切さを知ることに有効であったと考える。

３　まとめる場において、手作り絵本による園児と感動を共有するための読み聞かせをしたことは、読書の楽しさを知るようになり、本を読むことの喜び・読後に本について語る力等の読書を楽しむための資質が育つことに有効であったか

生徒と園児それぞれが12のグループに分かれ、園児の場所を固定し、生徒が移動して３回読み聞かせをする形式を取った。園児は、３冊の読み聞かせを聞いたことになる。園児はとても楽しそうに読み聞かせを聞いていた。終わった途端「もう一度読んで。」と園児が生徒にせがむ場面が数多く見られた。なかには「今度は私が読む。」と保育園の絵本を持ってきて生徒に読み始める園児もいた。生徒たちもとても楽しそうに、講義で学んだことを生かしながら読み聞かせを行っていた。生徒と園児がそれぞれ、読み聞かせを楽しみ、感動を共有していた。帰路、「またやりましょう。」と何人もの生徒に声をかけられた。32名中29名（91%）が、読み聞かせを楽しいと感じたと自己評価カードで答えている。

Ａ男は、初めは恥ずかしそうに読んでいたが、少しずつ慣れ、後半は園児の表情を観察する余裕もみせた。また、他の二人の友人が行った読み聞かせを園児とともに楽しんでいた。自己評価カードに、「読み聞かせがとても楽しかった。」と答え、自分の読み聞かせを100点と記入している。園児に「もう一度読んで。」と言われたことが自信になったようだ。また、自己評価カードの「もっと本を読みたいと思いますか。」の質問に「読みたい。」と答えていた。

資料２　読み聞かせの様子

Ｂ子は、読み聞かせを最も楽しみにしていた生徒の一人である。読み聞かせを行う前から園児に歩み寄り、親しそうに話しかけ、コミュニケーションをとっていた。読み聞かせでは、園児の反応に気を配りながら、感情を込めて適切な間を取り絵本を読むことができた。自己評価カードには、自分の読み聞かせを90点と記入し、「とても楽しかった。」と答えている。また、10月に行った読書アンケートで、「月に何冊ぐらい本を読みますか」という質問に「０冊」と答えていたが、自己評価カードの「もっと本を読みたいと思いますか」の質問には「是非読みたい」と答え、休み時間に時折本を開いている。

以上のことから、まとめる場において、手作り絵本による園児と感動を共有するための読み聞かせをしたことは、読書の楽しさを知るようになり、本を読むことの喜び・読後に本について語る力等の読書を楽しむための資質が育つことに有効であったと考える。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　手作り絵本による読み聞かせを取り入れたことにより、読み聞かせを「楽しい」と感じることができた。このことから、手作り絵本による他者と感動を共有するための読み聞かせを取り入れたことは、読書を楽しむ生徒を育てるために有効であったと考える。

○　絵本作りの過程で、生徒は意欲的に話合いを行っていた。園児にわかりやすい適切な場面・言葉遣い・絵等を考え話し合うことよって、文章を要約する力や文章の構成を考える力が身についたと考えられる。

○　手作り絵本の作成や読み聞かせ活動によって、読書が楽しいものであるという実体験ができた。それは、生徒の読書への意欲を喚起することに有効であったと考える。しかし、実際に生徒がこれからどのくらい読書をするのかは、現時点では結論が出せない。今後、読書の実態調査を行い、その分析が必要である。

〈参考文献〉

・長倉　美恵子　編　『子どもの読書活動をどう進めるか』　教育開発研究所（2003）
・城田　和子　著　『読み聞かせわくわくハンドブック』　一声社（2001）